巴里でもなく白耳義のブリユッセルでもなくて安全に身を置ける土地といふことになると、ソアッソン伯爵夫人と同じく、やはり墺太利のほかにないといふことになる。

維納にはむかし先鋒隊の盟主だつたライズラー伯爵もゐることだから、たぶん、そこに潜んでゐるのにちがひない。幸ひ、パルマ公國は墺太利へ行く道筋だから、そこでラ・ヴォアザンに逢ひ、なほよく相談してみやうと、その翌日、三人は巴里を出發し伊太利行の驛遞馬車でパルマに向つた。

九、スペイン繼承戰爭並に、悲奇史の大團圓

巴里を出發してから三日目の晝すぎ、三人はパルマ公國の國境に近い低サアヴォア州のセブロオ村に着いた。

これより以前、西班牙ではフェルヂナンド王が死んで繼嗣がなく、ルイ十四世はこの虚に付け入つて西班牙の王位を簒奪しようと企て、自分の孫にあたるアンジュウ侯を西班牙の新王なりと布告した。

ところが、墺太利のレオポルド王は西班牙の王女を娶つたものでその子のフィリップこそ正統に西班牙の王位を繼ぐべきものだとルイ王の布告に抗し、この月の始め頃から風雲險惡となつてゐたが、墺佛兩國の間に、いはゆる「西班牙繼承戰爭」が行はれることになつた。

佛蘭西と國境を接するパルマ公國は英國と共に墺太利を援け、墺太利軍隊の通過を許したので、墺太利のユウジェンヌ皇子は大軍を率ひて佛國の國境に迫り、佛國はそれに對抗して雲霞のやうな軍隊をセボロオに集め、今にも戰端は開始されようといふ騷然たる有樣。隣國のパルマ公國は早や佛蘭西の敵國になつてゐることで、容易に國境の通過をゆるさない。止むを得ず、その夜は村外れの旅籠屋で明かし、その翌朝、一旦、瑞西までいつて、そこから墺太利に入らうと村外れまで來かゝると、三人の行手に大勢の村人や子供が手に手に棒片を振りまはし、「墺太利の女を殺してしまへ」と罵りながら走廻つてゐる。

先に立つたブリガンベールが何事かと人垣を押分けて眺めて見ると、七十ばかりの上品な服裝をした老婆の裳裾に猫の死骸や古靴を結びつけ、唾をひつかけろ、殺してしまへ、と喚めきながら手當りまかせに石を投げつけてゐる。

こんな工合では間もなく老婆を嬲殺しにするにちがひない。ブリガンベールは見捨ては置けなくなつて群衆の中へ割つて入り、何でこんな老人を苦しめるのだ、と言ひながら村人や子供を突退け押分けると、みなこの權幕に驚いてちりぢりに逃げて行つてしまつた。

ブリガンベールは老婆人の裳裾に結びつけられた穢くるしいものを取棄て、親切に着物の埃などを拂つてゐると、その老婦人は孔も明かんばかりブリガンベールの顏を瞶めてゐたが、唐突に、

『おう、お前はブリガンベールではないか。……これはしたり、テレエズもコフスキーもゐる』

と、叫び出した。

不思議に思つてテレエズとコフスキーも近づいて老婦人の顏を眺めると思ひもかけぬ、それはソアツソン伯爵夫人だつた。

顏には幾重の皺をたゝみ、阿娜に美しい以前の面影はどこにもないが、若かりしころルイ王を惱殺したその眼だけはまだどこやらにほのかにむかしの名殘をとゞめてゐる。

先の大宰相マザランの姪として佛國第一の名家に生れ、佛國の政治を左右するほどの權威を持つてゐた夫人のこの成れの果てを見て、テレエズは、胸が迫つて思はず涙を流しながら、

『ソアツソン伯爵夫人、あなたは墺太利にゐらつしやるのだとばかし思つてゐましたのに、こんなところで、どうしてまア、こんな無殘な目に……』

と問ひかけると、伯爵夫人は半ば狂した人のやうな口調で、

『私はね、鐵假面がロリツプだといふことがわかつたので、どうしても救つてやるつもりで先々月維納を發つてこゝまで來たところが、思ひがけずこの村の宿で重い病氣になり、今日やうやく宿は出たが病氣をしてゐる間に戰爭がはじまり、わたしが墺太利人だといふことで佛蘭西人奴らが寄つてたかつて酷い目に逢はしてゐたところだつたのだよ』

早口に言立てゝ、皺だらけの頰にむかしのまゝの傲慢な微笑をうかべ、

『今はもうルーヴオアも死に、次の大宰相のバルブジユウも死に、シエミライが政治を執つてゐる。ルイとても、もうむかしの罪を忘れて、私の願ひをきくだらうから鐵假面の赦免を願ひに巴里へ行くつもりなのだ。……私はもう七十に近い齡になり、墺太利にゐても息子にまで意見をされねばならぬ。煩さくつて焦れつたくつて、もう生きてゐるのは厭になつた。どうせ死ぬならたゞ一人眞實に愛したロリツプを救出して彼といつしよに死にたいのが私の願ひ。……今から二ケ月ほど前、マルセル・ダルモアーズの達者な姿を維納で見かけたから、もう鐵假面は誰が何と言つてもロリツプに決つてゐる。とにかく、私は巴里へ行つて、どんなことがあつてもロリツプを救出すつもりなのだ』

マルセル・ダルモアーズの達者な姿を見たといふのは三人にとつてはこれ以上の意外な話はなく、これ以上の吉報はない。しかし、往來端では細かい話も出來ないので、昨夜三人が泊つた旅籠屋まで引返し、いつどこでアルモアーズに逢つたかと懇に訊ねると、伯爵夫人は、この廿年ほど前から墺太利の陸軍に「老將軍」といふ通稱で呼ばれてゐる騎士があり、その名はたびたび自分も聞いたが、今年の觀兵式に始めてその人を見ると、齡こそとつてゐるが紛れもないむかしのマルセル・ダルモアーズ。そこで、聯隊の士官に老將軍の身の上を聞き訊して見たところ、どこの人かは知らぬが、あたしの倅のプランス・ユウジエンヌの參謀を勤めてゐるといふ返事でいよいよダルモアーズであることが

確かになつた、といふ返事だつた。

マルセル・ダルモアーズが墺太利の陸軍の參謀として今なほ生存してゐることがわかつたので、三人は手を取つて喜び合つたのち、この長年の出來事を、代る代るに伯爵夫人に話し、ロリツプ・トウリエが死んで巴里の聖ボオルの墓場へ埋められたことを物語ると、伯爵夫人は涙に沈み、物狂はしいまでに泣叫んでゐたが、死んだものは今更どうしやうもないわけで、もう巴里へ行くこともいらないわけなのだから三人に慰められるまゝロリツプのことは思ひ諦め、こゝから維納へ引返すことになつた。

ソアツソン伯爵夫人は墺太利王國の近親にあたる身分の高い人で、特別の通過許可書を持つてゐるから三人を從者の體にしてパルマ公國へ入り、「老將軍」にも引逢はせようといふことで、翌朝早く旅籠を出、國境まで行つたところが、前夜のうちに戰爭がはじまり、國境の一帶では激戰の眞最中。

佛蘭西軍は堡塞の砲口を開き、一擧にユウジエンヌの軍を打破らうとつるべ射ちに射ちかけると、墺太利の慓騎兵は彈丸雨飛の間を物ともせず一團となつて突進して來る。

一同は近寄ることもならず、高い堤の蔭に身を隱して竦んでゐると、それから卅分ほどの後、再三の騎兵の突擊に佛國の砲兵もつひに支へ切れず、堡塞を棄てゝ逸走しはじめた。

長劍を秋の尾花のやうに振翳しながら先頭に進んで來たのは、甲か假面か、黑い丸い玉のやうなもの

のを頭からスツポリと被り、金モールのついた緋羅紗の上衣に羽根飾のついた白のマントウを羽織り、白馬に拍車をくれて白旋風のやうに堡塞を乘越えて來た。

ソアツソン伯爵夫人は、堤のうしろからそれを眺めてゐたが、突然、三人のはうへ振返へると、甲高い聲で、

『それ、あれが「老將軍」だよ』

と、叫び立てた。

テレエズは、あゝ、と呻きとも啜泣ともつかぬ聲をあげながら、堤から跳出すと、間も置かせずにコフスキーとブリガンベールは驀地に堤から驅け降りて老將軍のはうへ走つて行き、左右から馬の轡に取縋つて、

『旦那さま、よくまアご無事で』

『旦那さま、ブリガンベールでございます』

と、聲を揃へて叫び立てる。

馬上の人は、あはたゞしく首を動かして左右を眺め、感慨無量な體で、瞬間、首を垂れてゐたが、ソロソロと手をあげて鐵の假面を取外した。

齡ははや六十を過ぎ、髮も眉も雪よりも白くなつてゐるが、眉は一文字に、眼は淸しく、かのむか

し決死先鋒隊の隊長だつたマルセル・ダルモアーズ。

馬の轡に縋つてゐる二人を無言のまゝ凝然と見おろしてゐるところへ、テレエズは轉ぶやうに驅けて來て、

『あゝ、マルセル、マルセル……』

と聲を限りに呼びながら、狂つたやうにその膝のあたりへ縋りつく。アルモアーズは、はやもう堪へかねたやうに、ヒラリと馬から飛びおりてテレエズを腕の中に抱き緊めるとたゞたゞ涙に咽ぶばかりであつた。

マルセル・ダアルモアーズはルイ王に對する多年の恨み、いまこそ報ひる時がきた、と殊更に鐵假面を被つたまゝ佛蘭西に乘込んできた。「鐵假面の將軍」と呼ばれる老騎士が西班牙の繼承戰爭並びに波蘭王位繼承戰爭に比類のない軍功を樹てたことは墺太利の戰史に殘つてゐるが、これがそのむかし、バスチーユ監獄に幽閉されてゐた「鐵假面」その人であることを知る者はごく稀れである。

テレエズとソアツソン伯爵夫人はユウジエンヌ殿下の計ひで國境から馬車でパルマのラ・ヴオアザンの許に送られたが、戰爭がすむと墺太利の宮廷に移り、ブリガンベール、コフスキーの二人はアルモアーズとテレエズに仕へ俱に天壽を完うした。

（完結）

昭和十五年十一月廿五日印刷
昭和十五年十一月廿九日發行

不許複製
著作權所有

博文館

（世界傳奇叢書）
鐵假面……奥付
（特）定價壹圓五拾錢
著者 久生十蘭
東京市日本橋區本町三ノ九
株式會社 博文館
發行者 大橋進一
東京市小石川區戸崎町一三
印刷者 多木壽一
東京市日本橋區本町
發行所 株式會社 博文館
（振替東京二四〇番）
多木印刷所印刷

風雲ゼンダ城	横溝正史譯	四六判上製洋裝 定價一・五〇	四六〇頁 〒・一四
紅はこべ	横溝正史譯	四六判上製洋裝 定價一・五〇	三二〇頁 〒・一四
武俠聯隊長	大佛次郎譯	四六判上製洋裝 定價一・五〇	四三二頁 〒・一四
キャラコさん	久生十蘭著	四六判上製函入 定價二・〇〇	五四四頁 〒・一四
紅鱒	乾信一郎譯	四六判上製函入 定價二・〇〇	三六〇頁 〒・一四
中央アジア熱沙行	春日俊吉著	袖珍判紙裝並製 定價一・〇〇	一九〇頁 〒・〇六
埋れた戰史	林專之助著	四六判上製洋裝 定價一・四〇	二七八頁 〒・一〇
地雷火隊長	伊藤正平著	四六判上製羊裝 定價・八〇	二〇〇頁 〒・一〇

終